

教員の研究成果



本学Webサイトに掲載された記事を中心に紹介します。＜2024年11月～2025年10月＞
教員等の身分は、記事掲載時の情報です。

「世界で最も影響力のある研究者トップ2%」に 本学教員・研究員がランクイン

スタンフォード大学とエルゼビア社による「標準化された引用指標に基づく科学者データベース（Version 8）」が2025年9月19日に公表され、中央大学の専任教員・専任研究員10名が全世界の上位2%に選出されました。本データベースは、Scopusの情報を基に、22分野・174サブ分野で少なくとも5編以上の論文を発表した研究者を対象に、被引用数（自己引用を除く）やh-indexなど複数の指標を組み合わせて評価しています。分析は「単年」（2024年中）と「生涯」（2024年末まで）の2区分で行われています。

研究
Web ページ



ELSI センターと大阪大学 社会技術共創研究センターが 「ELSI 大学サミット」を共同開催

2025年3月15日～16日に「ELSI 大学サミット」を共同開催しました。生成AIやマルチモーダルAIなど先進科学技術の進展が社会に新たな価値と課題をもたらす中、倫理的・法的・社会的課題（ELSI）への対応が重要となっています。本サミットでは、学术界と産業界におけるELSIとRRIの取り組みに焦点を当て、開発、活用、規制を担う多様なステークホルダーからの報告を実施。また、質疑応答やパネルディスカッションを通じて、それぞれの役割と連携の重要性について活発な議論が交わされました。



講演資料と
基調講演動画は、
こちらから▼



ELSI 大学
サミット



理工学部教授 國井康晴

中央大学とispace、将来の月溶岩チューブ探査ミッションで用いる 小型AIロボット群の月面への輸送実現のための協力を合意

2025年3月7日、理工学部教授國井康晴がプロジェクトマネージャーを務める内閣府ムーンショット型研究開発制度プロジェクトの実施において、中央大学と宇宙スタートアップ企業・株式会社ispaceは、小型AIロボット群を月へ輸送するための技術検討に関する覚書を締結しました。両者は2028年以降、複数回のミッションでロボットを月面に送り、月の地下にある「月溶岩チューブ」の探査を目指します。本プロジェクトでは、単純機能の小型ロボットが群を形成し、集団知能を発揮して自律的に進化する仕組みを研究。月溶岩チューブは将来の有人基地建設候補地として注目されており、今回の取り組みはその実現に向けた重要な一歩となります。

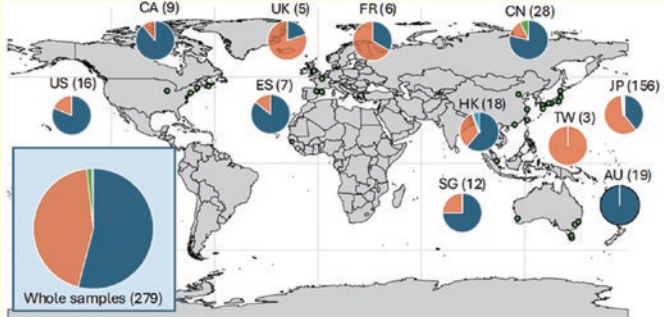


本取り組みの進展により2050年頃の構築を見込む溶岩チューブ内の探査拠点のイメージ図

法学部教授 海部健三ら

世界規模で絶滅危惧種のウナギ消費の実態を把握 DNAバーコーディングと生産・貿易データを組み合わせた 分析により「どの国・地域で」「どの種のウナギ」が消費 されているのかを解明

法学部教授海部健三、白石広美研究員、台湾国立大学の韓玉山教授らは、DNAバーコーディングと生産・貿易統計を組み合わせ、世界のウナギ消費実態を初めて定量的に解明しました。11か国・地域で収集した279品を分析した結果、アメリカウナギ、ニホンウナギ、ヨーロッパウナギなど4種を特定し、世界消費の99%以上が絶滅危惧種3種に集中していることが明らかになりました。消費の中心は東アジアで、日本が1人あたりの供給量世界一でした。研究結果は、2025年8月15日に国際学術誌「Scientific Reports」に掲載されました。



サンプル採取地域と国ごとの種構成
緑の点はウナギサンプルを採集した都市。円グラフは11カ国・地域の種構成を示す。
■アメリカウナギ、■ヨーロッパウナギ、■ニホンウナギ、■インドネシアショートフィンウナギ

経済学部准教授 吉見太洋

日本のFX投資家の属性と収益性の関係を分析 （口座レベルデータのエビデンス）

経済学部准教授吉見太洋は、SBI FXトレード株式会社の口座レベルデータを用い、日本のFX投資家における属性と収益性の関係を分析しました。これまで海外では同様の研究が存在していましたが、日本に特化した研究は多くありませんでした。分析の結果、収益性は個人資産額や年齢が高いほど正の影響を持つ一方、男性が保有する口座、年収、取引間隔が長い場合は負の影響を持つことが明らかになりました。また、取引成功率は特に女性や年齢が上がるほど強く表れました。これらの結果は、先行研究が指摘する「Learning about Abilityの効果」（投資家としての素養の発見効果）が性別や年齢などの投資家の属性に依存していることを示唆しています。本研究成果は、日本金融学会中部部会で発表されました。



商学部教授 寺本高ら

2024 ANZMAC-GAMMA Joint Symposium 「Best Symposium Paper Award」を受賞

商学部教授寺本高らの共著論文“Digital Coupon Effectiveness in Shopping List Creation”（買物リスト作成におけるデジタル・クーポンの効果）が、国際会議2024 ANZMAC-GAMMA Joint SymposiumでBest Symposium Paper Awardを受賞しました。本研究は、小売アプリの買物リスト機能を利用するタイミングで配信されたクーポンの効果を分析したものです。その結果、快楽型クーポン（例：ビール、コーヒー飲料）は償還率が高い一方、リスト作成中に実用型クーポン（例：洗剤、ハンドソープ）を受け取った顧客は、リストへの記入数や実際の購入数が増加することが分かりました。これは「自分は賢く買い物をしている」という意識が高まる心理的效果によるものと示唆されています。



理工学部教授 福井彰雅ら

ヒトの7倍の巨大ゲノムを解読 ーイベリアトゲイモリが示す発生・再生・進化・行動の謎ー （基礎生物学研究所等との共同研究）

理工学部教授福井彰雅が加わる研究チームは、有尾両生類「イベリアトゲイモリ」の全ゲノム解読に成功しました。解析対象は日本で樹立された近交系統で、約200億塩基対（ヒトの約7倍）に及ぶ巨大ゲノムです。解析の結果、ゲノム巨大化に関わる反復配列、器官再生における遺伝子発現制御、両生類の進化やイモリ特有の生殖行動に関わる遺伝子の特徴などが明らかになりました。本研究の成果は、イモリが持つ様々なユニークな生命現象の謎に迫るための重要な情報として、生物学の分野において幅広い展開が期待されます。本成果は米国学術誌『iScience』に掲載されました。

本研究成果は、2025年10月2日、基礎生物学研究所、広島大学、東京科学大学、琉球大学、国立遺伝学研究所、日本獣医生命科学大学、徳島大学、東邦大学、玉川大学、鳥取大学と共同発表を行いました。



広島大学両生類研究センターより提供

理工学部教授 檀 一平太

パッケージデザインが消費者の感情に与える影響を評価 （産学連携）

理工学部教授檀一平太は、森永製菓株式会社と共同でソフトキャンディ「ハイチュウ」のパッケージデザインが消費者感情に与える影響を研究しました。心理測定学（サイコメトリクス）の手法「SORモデル（刺激-体内内条件-反応モデル）」を用いて約1000人を対象に調査を実施。その結果、品質、見た目、五感に訴える魅力、感情に訴える魅力、おいしさの想起の5要素が購買意欲に関わることが確認されました。さらに、新パッケージの「Tease」要素が「親しみやすさ」や「新奇性」をわずかに高めることも明らかになりました。



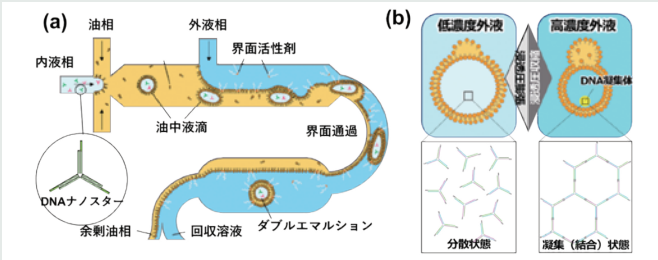
現行パッケージデザイン
商品写真提供：森永製菓株式会社
新パッケージデザイン

理工学部教授 鈴木宏明ら

マイクロ流体デバイスを用いて核モデルを持つ人工細胞を 大量生産 ～階層構造を有する均一・均質な人工細胞を実現～

理工学部教授鈴木宏明らの研究グループは、マイクロ流体デバイスを用いて、人工核モデルを有する均一な人工細胞を大量かつ再現性高く生成する技術を開発しました。細胞サイズの脂質膜小胞内にDNAナノ構造体を封入し、糖濃度差による体積変化を利用してDNA凝集体を形成。これにより、加熱・冷却を伴わずに核モデルの構築を実現しました。さらに、この人工核内の遺伝子から緑色蛍光タンパク質（GFP）の合成にも成功。細胞内の階層構造や機能を模倣する人工細胞製造技術の大きな前進として、天然の細胞を代替する展開が期待されます。

本成果は、2025年6月16日（米国東部時間）付で米国化学会のオンライン学術誌「JACS Au」に掲載され、東京科学大学と共同発表を行いました。



文学部教授 山口真美

令和7（2025）年度科研費・学術変革領域研究（A） 「顔身体デザインのデザイン:実践・実証・設計に基づく顔身体 の深化と昇華」の領域代表に採択

文学部教授山口真美が、令和7（2025）年度科研費・学術変革領域研究（A）「顔身体デザインのデザイン:実践・実証・設計に基づく顔身体 of 深化と昇華」の領域代表に採択されました。

中央大学として初の採択となります。山口教授は、前身の新学術領域研究「顔・身体学」（2017～2021）に続き、総括班として研究全体を統括。本領域では、アートやパフォーマンスによる【実践】、感覚や情動の科学的解析による【実証】、ロボット工学を用いた【設計】を融合し、未来の人と人工物の「顔」と「身体」の在り方を創出、個人の痛みを解消する社会の実現を目指します。



国際情報学部教授 飯尾淳

飲酒機会・頻度や在宅勤務とウェルビーイングの関係を 共同研究で発表（産学連携）

国際情報学部教授飯尾淳（iDSゼミ）と株式会社ロイヤリティ マーケティングは、共通ポイントサービス「Ponta」の調査データを用いた共同研究を実施し、社会情報学会大会で「20代における飲酒頻度が及ぼすWell-beingへの影響」と「リモートワークとウェルビーイングの関係性」の2件を発表しました。前者では、週1回以上自宅外で飲酒する20代が、充実感や外向性などで高いスコアを示し、交流促進との関連が示唆されました。後者では、在宅勤務の方が充実感や自己満足度が高い一方、光熱費や人間関係の課題も確認されました。

参考）学部横断型iDSプログラム

AI・データサイエンスを実践的に学ぶ全学的教育の場です。複数学部の学生が協働し、分析力だけでなく多様な立場との対話力を育み、DX時代に対応する人材を育成します。

国際経営学部准教授 大坪弘教

研究論文が、実験経済学の主要誌『Experimental Economics』 （Cambridge University Press刊）に掲載

国際経営学部准教授大坪弘教の研究論文が、2025年9月1日に実験経済学の主要誌『Experimental Economics』（Cambridge University Press刊）に掲載されました。本研究は、交通経済学で知られる「Downs-Thomsonのパラドックス」を経済実験で検証したものです。道路と鉄道という2つの通勤手段を想定し、出発時刻の選択要素を加えた拡張モデルを用いて、ゲーム理論的に分析しました。その結果、鉄道の改善だけでなく道路の改善でも通勤費用が減少する傾向が確認され、理論とは異なる社会的に望ましい行動が観察されました。

